

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 8 月 20 日	
所属部局・職	霊長類研究所 生態保全分野・修士課程 1 年
氏名	武 真祈子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
スリランカ
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
International Training Program on Terrestrial & Aquatic Wildlife & Primate Conservation
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 27 年 7 月 31 日 ~ 平成 27 年 8 月 17 日 (18 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
スリランカ国 Sri Jayewardenepura 大学大学院 Swarna Piyasiri 教授, Charmalie Nahallage 博士, Kamal Ranathunga 博士
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果: 長さ自由)
<p>写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p><概要></p> <p>スリランカは、面積にして北海道の 0.8 倍という小さな島国であるが、顕花植物、両生類、爬虫類、哺乳類の種密度がアジアで最も高い国である。一方で、人口密度もアジアで 2 番目に高く、生物多様性ホットスポット (生物多様性が極めて高く、かつその保全が急務な場所) の一つとして認識されている。</p> <p>本プログラムは、スリランカの多様な自然を体験し、その保全のあり方や野生動物との共存の仕方を考えることを目的として行われた。参加した学生は、霊長類研究所 (PRI)、野生動物研究センター (WRC) からの計 7 名、引率は PRI の Michael A. Huffman 教授と田中洋之助教の 2 名であった。</p> <p>スリランカでは、スリランカ側のプログラムコーディネーターであるスリジャヤワルダナプラコテ大学の Charmalie Nahallage 博士と Kamal Ranatunga 博士、また同大職員の Atheeq 氏と Vdyanı 氏が交代で同行して下さった。</p> <p>コロンボでの開会式のあと、2 週間かけてスリランカ南部から東部の国立公園や自然保護区をめぐり、それぞれ担当の講師の方から、現地の生物多様性、人と自然のコンフリクト、国立公園としてのマネジメントなどについて教えていただいた。大半の行程を終えた 11 日には、各学生が、それまでに見た保護区の問題や解決策についてのプレゼンテーションを行い、ディスカッションをする機会もあった。最終的に計 5 個の国立公園、4 つの世界遺産 (うち 2 つが自然遺産) を訪れる、充実の旅となった。</p> <p><成果></p> <p>本プログラムを通して、湿潤な熱帯雨林からサバンナ様の乾燥地帯、標高 2300m の高原に至るまで、スリランカの多彩な植生、数多くの固有の動植物を目にすることができた。ただ見るだけでなく、各地でその道のエキスパートからお話を聞いたことも大きかった。</p> <p>わたしは人と自然の共存や、環境教育といったテーマに興味を持っている。豊かな生物多様性に感動すると同時に、環境保全に対する人々の意識や管理体制の甘さにも驚いた。どこにいても、国立公園の中でさえも、散乱するゴミとそれをあさる野生動物の姿があった。また、人がサルなどにお菓子や果物を手渡しで与える姿も頻繁に見られた。その背景にあるのは、単にマナーが悪いとか、自然を大切にしていないとか表面的なことだけではないように感じた。小さな島国で、人と野生動物との物理的・心理的な距離が近く、当たり前前の存在として暮らしてきたことや、スリランカ人持ち前のおおらかさ、また、ゾウやクジャクなどは宗教的な存在であり、人がどうこうして守る対象ではないことなどが関係しているのかもしれない。風土や国民性、宗教感にあった環境教育が求められると感じた。</p> <p>プレゼンテーションでは、特にゴミのポイ捨てやサファリジープの混雑など問題点が目立った Yala National Park を担当した。解決策として、飲食物の持ち込み制限や、デポジット形式での販売、ジープドライバーからガイドへの転職、動植物の知識が豊富な Traditional doctor との協力などを提案し、多くの助言を得て考えを深めることができた。Charmalie 博士から、プレゼンテーションの内容を Yala の管理者に送る提案をいただいた。それが実現すれば、今回の旅で学び考えたことの具体的な成果になるであろう。今回は主に研究者のお話を聞いてまわったが、次回またスリランカに行く機会があれば、環境問題について地元住</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

民や Traditional doctor の考えも聞いてみたい。

また、今回の旅は、日本、スリランカ、プエルトリコ、チリ、ハンガリー、フランス、アメリカ合衆国という7カ国から人が集まっており、非常に多国籍であった。各国の言葉や文化について教えあったり、誰かの冗談にみんなで大笑いしたり、保全の問題の難しさに向きあったり、国を越えた一体感を感じられた。素晴らしい経験だった。バスやホテルでの雑談の中で、英語での会話能力も向上したように思う。留学生の会話に恥ずかしがらず参加することが大事だと再認識した。語彙力のない私に逐一単語の意味や使い方を教えてくれた留学生たちに感謝したい。

- 7/31 名古屋発フライト(名古屋-バンコク-コロンボ)
- 8/1 未明にコロンボ着。宿舎に移動。買い物など
- 8/2 プログラム開会式@コロンボ
- 8/3 熱帯雨林の動物相の観察@Shinharaja World Heritage
- 8/4 熱帯雨林の植物相に観察@Shinharaja World Heritage /移動。シュノーケリング講習
- 8/5 マングローブ湿地ボートツアー@Madu ganga /ウミガメ保全活動@Kosgoda
- 8/6 珊瑚礁とそこに住む生き物の観察@Hikkaduwa
- 8/7 野生動植物の観察@Bundara National Park(ラムサール条約登録湿地)
- 8/8 スリランカにおけるサルとヒトの関係について視察@Kataragama temple
- 8/9 野生動植物の観察@Yala National Park /ゾウと人のコンフリクトについて(講義+視察)
- 8/10 移動。
- 8/11 プレゼンテーション&ディスカッション / 高原の植物相・動物相について(講義)
- 8/12 高原の植物相・動物相の観察@Horton Plane National Park
- 8/13 移動(途中、世界遺産シーギリヤを見学)
- 8/14 珊瑚礁とそこに住む生き物の観察@Pigeon Island /閉会式@Trincomalee
- 8/15 コロンボへ移動
- 8/16 買い物 / Chamalie 博士の研究室見学 /空港へ移動
- 8/17 フライト(コロンボ-バンコク-名古屋)

<各行程の内容>

以下、各行程について写真とともに報告する。

開会式

コロンボのホテルにて、スリジャヤワルダナプラコテ大学の学長も出席のもと、盛大に行われた。式のあと、同じ会場でスリランカの自然についての講義を4つ受けた。



開会式直前の様子



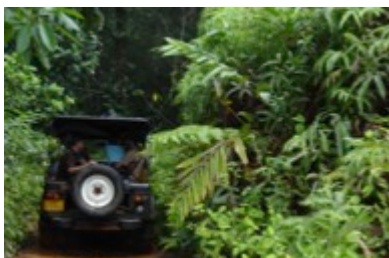
伝統的なダンスで歓迎していただいた



初日と最終日に宿泊した Youth Centre

Shinharaja World Heritage

この熱帯雨林は世界遺産に登録されており、スリランカの中でも特に生物多様性の高い場所である。固有の動植物が数多く生息する。ここでは、動物、植物それぞれに着目した2回のトレッキングを行った。



かつて木材伐採のために拓かれた道。現在はエコツーリズムに活用されている。



森林の再生についての講義。



スリランカ固有の鳥、Sri Lanka blue magpie

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

Madu ganga

ここはスリランカで 2 番目に大きな湿地であり、小さな島がいくつも点在している。私たちはボートに乗って島々をめぐり、マングローブの茂みやそこにやってくる鳥類、ラングール、釣りの様子、寺院などを見学した。また、シナモンスティックの作り方や、ヤシの葉を用いた屋根の作り方も見学した。



ボートに乗り込む。



湿地に浮かぶ島と漁の様子。



シナモンスティック作りの実演。このように乾燥させる。

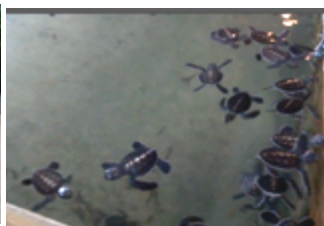


Kosgoda

スリランカには、世界で 8 種いるウミガメのうち 5 種が産卵のために上陸する。Kosgoda では、漁師が見つけたウミガメの卵を買い取り、施設で孵化させ、三日後に海に放流するという保全事業を行っていた。そのほか、病気・怪我・生まれつきの奇形などで自然界では生きていけないウミガメの飼育も行っていた。私たちも生後 3 日のウミガメの赤ちゃんを手に取り、海に向かって放す体験をさせていただいた。手のひらサイズの子亀たちが暗い大きな海に向かってひた歩いていく姿は印象的だった。



ウミガメの卵が埋められている場所。



生後 3 日目の赤ちゃん。



奇形のウミガメ。



放流は暗くなるのを待ってから行う。

Hikkaduwa Marine National Park

Hikkaduwa 海洋国立公園では、珊瑚礁とその保全についての講義を受け、実際に保護区内でシュノーケリングを行った。残念なことにこのサンゴはほとんど死んでおり、水も濁っていてあまり美しい海とは言えなかった。拡大する観光業を、サンゴの保全のためにどうやって規制するのか、というのが難しい問題であるようだった。



Hikkaduwa の海を前に記念撮影。
(撮影:Kasumi Sakakibara)



観光客のボート。
(撮影:Kasumi Sakakibara)



海底には死んだサンゴばかりだった。
(撮影:Kasumi Sakakibara)

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

Bundara National Park

Bundara 国立公園は、乾燥地帯に位置しながら広大な汽水湖も有し、ラムサール湿地に指定されている。フラミンゴなど多くの水鳥やワニなどの貴重な住処である。私たちは、汽水湖を望む展望台から水鳥を観察したあと、ジープサファリを行った。バッファロー、クロコダイル、グレイラングール、マカク類などが次々に現れ、間近で観察することができた。野生のゾウを初めて見て、この上なく興奮した。



汽水湖を望む展望台。



乾燥地帯の植生。



ジープサファリの様子。



ウミガメもやってくる Bundara のビーチ



水浴びをするバッファローたち。



池のほとりを歩くセイキイ



野生のアジアゾウのファミリー。



Bundara の夕焼け。

Kataragama

Kataragama 神殿は、ヒンドゥー教、仏教、イスラム教の共通の聖地であり、スリランカ全土から多くの参拝客が訪れる。公園内にはグレイラングールやトクモンキーが多数生息しており、ヒトとサルとの共通感染症が蔓延するリスクも高い場所となっている。実際に行ってみると、多くの人で賑わっており、サル（特にグレイラングール）がそこら中にいた。中には、参拝客から手渡しでえさをもらうサルや、人が捨てたお弁当をあさるサルなども見られた。



たくさんの人とたくさんのラングール。



おもむろに向こうからゾウが歩いてきた。



人が捨てた弁当をあさるラングール。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

Yala National Park

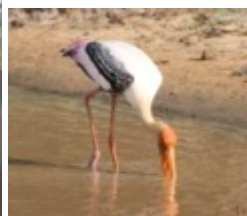
Yala 国立公園は、スリランカで最初にできた国立公園であり、最も有名な観光地のひとつでもある。ヒョウの密度が世界で一番高い。我々もヒョウを探したが、残念ながら見ることはできなかった。動物よりも、ジープの混雑ぶりや、ゴミの多さが目についた。エデュケーションセンターも申し訳程度のものしかなく、改善すべき点が多いと感じた。



来園者が捨てた大量のゴミ。



サファリジープの渋滞。



カエルを探すインドトキコウ。



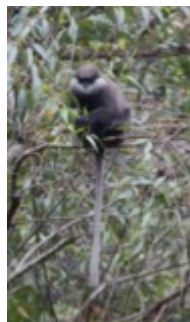
野生のイノシシ。

Horton Plains National Park

スリランカの中央高地、標高およそ 2300m の場所に位置する国立公園である。同じ国とは思えないほど気温が低く、夜には 10℃を下回った。5 時間ほどトレッキングを行い、これまでの旅とは全く違った高原の植生を観察した。また、固有種のカオムラサキラングールも見ることができた。このサルは毛が長く体が大きいことから「Bear monkey」とも呼ばれている。同じ「国立公園」であっても、ここではプラスチックバックの持ち込みが禁止されているなど、管理体制がしっかりしており、Yala とは随分違った。博物館や、道の途中にある解説版も充実していると感じた。



中央高地の植生。



「Bear monkey」



滝と木生シダ。



固有種のスリランカメジロ。

Sigiriya World Heritage

5 世紀に建設された遺跡である。シギリヤロックという 195m の高さの巨大岩は要塞化されており、頂上には王宮の跡がある。私たちは次の場所への移動途中に立ち寄り、2 時間ほどかけて頂上までの往復をした。壁画や岩の上からの景色が素晴らしかった。



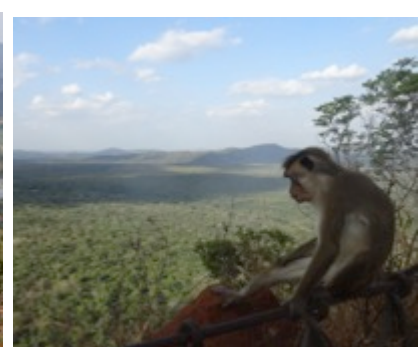
シギリヤロック。



シギリヤ・レディ



シギリヤロック頂上からの眺め。



頂上にはトクモンキーもいた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

Pigeon Island Marine National Park

最後のアクティビティは、Hikkaduwaに引き続き珊瑚礁の観察だった。Pigeon IslandはHikkaduwaに比べて水が澄んでいて、魚もより多く見られた。それでも、観光客が多いため、人やボートによって壊されてしまうサンゴも少なくないだろうと感じた。



Pigeon Islandに向けてボートで出発。



珊瑚礁と、ウミガメ。

(撮影 Kasumi Sakakibara)



観光客で賑わう Pigeon Island



ビーチにはサンゴの死骸もたくさんあった。

6. その他 (特記事項など)

素晴らしい体験をさせていただいた皆様に感謝します。特に、1年前から準備を進めてくださったマイク先生やチャーマリーさん、また資金的なサポートによって送り出させていただいた PWS コーディネーターの松沢教授、航空券の手配などをしてくださった秋山さん、左海さんに深く感謝申し上げます。